「魔風恋風」・幻の《義姉妹》考

――明治貝合小説成立前夜――

大森郁之助

I

明治三十年代前半にいわゆるゾライズムを「自己の作物中に真にとり入れた」「最初」（伊狩章氏）の作家、小杉天外は、尾崎紅葉を去らしめた後の読売新聞の小説欄再興の期待を荷った「魔風恋風」（明36・2・25～9・15同紙）が空前の人気を博し、少時、「硯友社一派の、第一期の写実派が退いたあとの、『新写実派』の筆頭とみなされ」（同）、流行作家の第一人者ともなる。

しかしこの「魔風恋風」が、当時世人の憧れの的だった大学生（勿論、東京帝国大学の）と〈女子学生〉との恋愛を骨組みとして時代の最先端の風俗を描いたとは云い条、その〈大学生〉なり〈女子学生〉という設定がそれに相応する内容を殆ど伴なわず、形骸だけ、そう称されているだけの設定だったことは、今では定説といってよかろう。

形骸だけ、そう称されているだけ、とは、それらの人物が一向に〈大学生〉らしくも〈女子学生〉らしくもない、その恋愛がべつだんそうした人々の恋愛らしさ（これはそう容易ではないとしても）をもたない、ということだが、同じように評し得るモチイフがもう一件、あるのではないか。それはこの作品の主題である青年男女の恋愛の次の、副主題といってよかろう第二の性愛――と称されている一組の人間関係――である。

そもそもこの作品の中心人物は三人いて、「帝国女子学院」の生徒萩原初野（学年は不詳《後述》だが今夏卒業予定）・夏本芳江（一年下級）の二女性と夏本家の養子で芳江の許嫁の法科大学生東吾で、その間に三角関係が生ずるのだが、その初野と芳江とは三角関係の生ずる遥か以前から「姉妹の誓」を交わす「義姉妹」の仲だった、とされている。しかし、関係成立の先後とは別に一たん成立した後の優劣強弱では、同性間関係は異性間関係の下風に立たされる――少なくとも異性愛を基本則とする正常な市民社会からはみ出さない性質（一程度）の情愛に、とりなされている。

前述の時間的先後から、初野の側では妹の許嫁という親愛感から東吾を「力と頼」んでいた時期があり、その隔意無さが知らぬ間に男と女としても近づけてしまったとも解されるので、初野の心中では、同性を捨てて異性を択るといった意識的選択は、少なくとも事前にはなされなかったものとも考え得る。しかし一方の芳江は、東吾との挙式を早めよう

とする母親から「最う此夏からは、貴女も良人の有る人」ゆえ初野のような「身分が違」う者との交際は慎むように、と命ぜられると、「何に成ツたツて」「萩原様とは終身の友達」と反論し、初野と東吾との間に誤解が生ずると許嫁に向かって「他の事なら何様な事でも、決して兄様の言葉を背きませんから」「初野様の事だけは恕して上げて」と頼む。共に、直接には二種類の愛の両立共存の希求だが、その前提は「良人」の存在や許嫁の諾否権なのだから、根本的には許嫁や夫との結合の下に同性との愛をも収めたいという希い、或いは、収まるべきものという感じ方ではないか。

そしてそれは勿論正常な感じ方であり希いであろうが、しかし、例えばこの作品の八年後、同じく新聞連載小説（明44・1・1～3・21大阪朝日新聞）である田村俊子の「あきらめ」に於ては、そうはならない。

瀬戸内晴美が「わが国の文学に、女の同性愛がこれほど真正面からとりあげられたのは、はじめて」と断じた（『田村俊子』、昭36・4文芸春秋新社）場面を含む、こちら「あきらめ」は、女主人公の女子大生荻生野富枝と二歳年長の以前の学友で女優志願の三輪初女、また、三年下級（付属の「高等女学」の五年生）で文部次官令嬢の房田染子との交渉が、一篇全体の究極のモチイフであるように解される。即ち、女主人公が東京での生活を〈あきらめ〉て郷里岐阜へ赴くという、題名―主題の、その〈諦念・断念〉感を読者に納得させる具体的な事情として、最も説得力をもつと思われるのが、この、年上年下二人の同性との愛の変転―挫折であり（とくに初出稿で）、そしてこの同性との関係（とくに染子との）はそうした役割にふさわしく、通常の異性間の関係の叙写としても通用しそうな、濃厚な情緒の纏綿する艶麗な描き方をされて（そういうものとして描かれて）いるのである。[註1]

さしあたって右「魔風……」での同性間関係の〈地位〉との対比を索めるなら、一篇の結尾近く、大磯の別邸に転地静養中の染子が富枝恋しさから病後の身を押して突然上京、それを送って大磯まで行った富枝がそのまま引き留められて、いよいよ今日は帰ろうとした三日目の朝、

（略）染子は泣寝入りをした様にその眼が腫れぼつたかつた。（略）染子は富枝の改まつた（帰り支度をして）姿を見て座敷の中に動かずにゐた。富枝は染子が寒いであらうと窓を閉めた。／「病気はどんなです。昨夜は何ともありませんでしたか。」／富枝が斯く言葉をかけた時、染子は涙を落してゐた。富枝も黙つてしまつた。／少時して染子を呼んでる夫人の声を聞いて、富枝は染子の手を引いて其室を出ようとした。染子は壁に寄りかゝつて泣き出した。／それも声を忍んで、時々、く、く、と云ふ押へたやうな声を出すだけだつたのが富枝には可憐らしかつた。下女は此室へ両人を迎ひに来た。染子は涙を拭きながら富枝に引つ張られて母のゐる方へ行つた。（略）「お客様に御飯を差上げませう。」／夫人は優しく染子に云つた。染子はそれに返事をしなかつた。／膳に向つても染子は箸を取らなかつた。

（初出稿第七十八回）

帰る時染子の姿が見えないので家の人は方々を探した。（略）やがて下女が来て、／「あちらのお座敷にいらつしやいます。」／と告げた。何をしてゐるかと夫人が聞くと、畳んだ夜着に寄りかゝつて泣いておゐでの様だと云つた。富枝は昨夜自分の寝んだ暗い座敷を思ひ出して淋しかつた。夫人は直ぐ見に行つたが再び独りで戻つて来て、／「失礼いたしますさうですから。」／と断つた。

（七十九回）

――という場面があって、結果的にはこれが二人の最後となるのだが、染子の愁嘆の事情はもう一つはっきりしないものの、それを受けとめている富枝の方の絶望感は明らかに昨夜染子の母親から染子に来年挙式予定（今は十二月）の許嫁がいると知らされたことに因る。

「魔風……」でのようにそれゆえの絶縁などは命ぜられていないようなのだが、二人とも（恐らく、染子も）、これで終焉と自ら思い切るのである。正常な社会の根本則である異性愛乃至婚姻関係の下に生存を許されるという在り方を、願い求めてみもしないのは矯慢、と非難してもいいが、同性愛としての〈純度〉がいずれが高いかは云うまでもあるまい。

「魔風……」に話を戻すと、初野の方は知らず識らずの裡に妹の許嫁という関係を越えてしまったものか、と先程想像もしたが、その後は行き違いや誤解を交えながらも男との間は深まって行き、一方、それを反映して男と芳江の間はこじれて行った結果、最終局面（芳江のまごころに打たれて三者和解の中に初野は死ぬ）の一つ前の段階では、初野の夢に、男「と二人で、何処か隧道のやうな暗い処を、際限も無く」逃げていると芳江が降ろしてよこした綱で男だけ助け上げられ、初野は

「あれ、東吾様、私を放棄つて置いて余りですよ。」と声を限りに呼んだ。

（第三十六　立聞）

とか、或いは又、親達に問い詰められた東吾が初野との「口約束」はきっぱり破約する、と誓うのを盗み聞いて、

「（略）彼様なことを云ふ人の為に……、私許り勤める義理が有るものか……、なに、調停する義務も何も……、其様な不公平な道理ツて有るものか……、（略）出来るだけ妨害して、二人の間を裂いて遣つても構やしない……、（略）」

（第三十七　遺書）

と考えるに至りもする。しかし許嫁「二人の間」の「調停」は、東吾にとってはともかく、少なくとも芳江の身に即していえば、東吾との間が離縁話にまで発展したのを嘆くあまり「彼様な病気にまで成ツて、梯子一つ昇るにも眩暈する者が」「家を飛出すまで思ひ詰め」、姉一人を頼りにしてひたすら希い望んでいることなのである。それを男への憤懣の余りに積極的に裂いてしまおうと思うに至るわけで、前の引用と合わせて、縋るにしろ却けるにしろ妹よりも男の方が強大な存在となり主動機となり、妹を押しのけ追いやることも屢〻（初野の心も揺れていて、常にではないが）である、といえよう。

ついでに云えば、芳江の〈家を飛出す〉云々は、母親から離縁話と代わりの別の縁談とを説きつけられて「不断着」に「束髪も乱れたまゝ」初野の許に「義姉さんの傍で一生を送る心算」と駆け込んで行ったことを指す。だがそうした、既に半ば裏切りつつある姉に対する芳江の変わらぬ信頼と親愛が、反面で、男に関わる絶望の救済を姉に求める、という、軽重の序列に於てもまた変わっていないことも、見落としてはなるまい。

さて、以上、「魔風恋風」での女同志の愛の限界性――いわば否定的側面を見て来たのだが、否定面を背中合わせに背負っているにしろ肯定面自体は勿論より積極的に説き示されているわけで、例えば、この「数年来」の二人の「交際」の睦まじさは

芳江は自分（初野）を姉と呼ぶが、自分もまた親身の同胞の様に思うて居た。学校に出ても互に顔を合はせるのを楽とし、帰る時も連立つて同じ道を帰り、それでも飽足らず、休日には必ず一緒に遊び暮すのであツた。

（第二十一　質屋の門）

と説明されているし、初野が自転車から落ちて骨折入院したり親代わりの郷里の兄と衝突して送金を断たれたりして生活費に窮すると、芳江は「口頭許しぢや無」く「真実姉様と思つてる」のに「水臭い」と怨じつつ自分から援助を約し、その工面で母親と揉めたりもする。

しかし敢えていえば、常に行動を共にするとか窮迫時の金銭的援助とかは、通常の親友一般の間でも見られよう。その域を越えて、通常は異性間の恋愛に於て（のみ）見られるような独特の感情や行為といったも

のは、「魔風……」の同性間には見られないのである。例えば「あきらめ」で、病気のため家族と離れて一人田端の別邸に移っている染子を見舞った折、付添の婢が富枝に訴える、染子の〈恋する少女〉としての錯乱ぶり――

「昨晩もお寝られません様で、随分心配いたしました。（略）這々人形を持つてらつしやいましてね、これをお姉様のお宅へ染子の記念だと言つて置いてこいと仰言るんで御座いますよ。さうしてお泣き遊ばして（略）」

（四十三回）

それは染子に言わせれば

「い、え、全く昨晩はね、あの這々人形が何か物を云ひさうで仕方がなかつたんですもの。さうしてね、妾の思つてる事を残らずあの人形が伝へてくれるやうに思はれて、思はれて仕方がなかつたんですわ。どうしたのでせう。」

（同）

或いは

「（略）阿女様も阿父様もお兄様も、誰れも彼れも厭で〳〵仕方がないんですもの。毎日斯うやつてお姉様が入来しつてさへ下されば誰れも来ない方が宜いんですの、煩くて〳〵仕方がないの。」

（四十四回）

といった心理からであった。這々人形の幻想と云い厭人と云い、作中〈脳神経衰弱〉と説明されてはいるが、富枝への思慕を思い合わせればオフェリアやお夏の昔からの恋する少女の典型的症候とも見える。しかし「魔風……」ではこうした非・常態の感情や言動は女同志の間では全く見られず、有るのは男に関わっての思い乱れのみである。

従って、より一般普通な形の、いわば正常なレヴェルの愛情表現も、人通りの疎らな夜の道で東吾の抱擁を受けた初野の見る人毎に心を悩ませた花の姿も、此の日此の夜、初めて男の唇を知つたのである。身体は顫へ、胸は躍つて、此の儘呼吸も止まるかと思ひながら、猶心は嬉しく、温かな夢の国へ飛行くところかとも感はる、。

（第三十一　わかれ）

といった激発昂揚に匹敵するような情景は、初野と芳江の間には描かれていない。入院して気が弱くなっている時の初野が芳江の見舞を受けていて、話のはずみから

行きなり利く方の手を伸べて、友達の繊細な手を強く握つた。握られた手の主ははッと思つて、その蒼白い顔を微し紅くした。

（第二　病院。傍点原文）

とか、家出して来た芳江が「行きなり初野に抱付」くとかいった程度を出ることはない。出なくていいではないか、それが普通だ、という納得は、普通ではない（筈の）〈義姉妹〉関係を自ら称する二人のありかたに関しては見当違いなわけで、かりにバイセクシュアリティの片面としての同性愛であっても二種の性愛は均衡しているのがその場合のノオマルな形であろう。げんに「あきらめ」では次のような、文字通りの〈後朝〉の場面もある。

富枝は柱に凭れて寝起の顔を恍惚とさせてゐる。／お姉様がお好きだからと云つて、染子はおはま（婢の名）の止めるのも聞かずに、昨夜江戸紫の二枚袷を着て寝た。長い裾を足に絡まして、白い敷布の上に下白を乱して寝てゐた姿を、夜中にふと眼を覚まして眺めた時の感じを、今富枝は縁に立つて奇異な夢のやうに繰り返してゐる。空が曇つて庭の色が沈んでゐる。赤や紫のダリヤの花を一と掬みにして持つた染子が浮き出した様に其所へ現れる。富枝は縁から懐愛しさうな笑みを送る。染子は下を向いて立つた儘、ダリヤの花弁を指で弾いてゐる。／富枝はふつと、その美しい人一人を自分の思ひ

の儘にしたと云ふ誇りが湧いた。／「此方へいらつしやい。」／と呼んで見た。染子は顔を上げて富枝を見たが、顔を斜にしてついと垣根の後へ入つて了ふ。昨夜の着物の紫の振袖が冷たい色に揺いで残る。

（四十五回）

（略）前の姿見に染子の姿が映つてゐる。富枝は振り向くと突如縁の柱に立つてゐる染子の傍へ行つて其の手を取る。染子は真赤になつて富枝の顔を仰いでゐる。／「何うして？」／と富枝は其の赤い耳髢に口をよせた。（略）「何故傍へ来ないの。」／斯う聞いた富枝も、自分の胸が騒いでるのを知つてゐた。／富枝は牛乳の滴つてゐるやうな染子の頬を吸つてやり度いと思つた。さうして、染子の差恥を含んだ風情を見度いと思つた。／「ね。」／と何がなし自分の望んでゐる事を求めるやうに、其の肩を揺ぶつたが、染子は黙つて下を向いてゐる。／「何か仰しやい。」／と富枝は再び其の肩を押す。下げた髪が背と柱の間から外れて富枝の胸へぱらりとかゝる。／「一生御一所にゐたい。」／染子は急に斯う云つて富枝を見上げる。眼の瞼に残つた薄い白粉が可憐らしく見える。息が機んでゐるのか、赤い唇を半開けてゐる。／「貴女さへ変らなければ……。」／「え。きつと。お姉様。」／強く握つた富枝の手を、感覚の失くなるほど染子も力を入れて握つてゐた。／染子の眼は、もう恋を知つた眼の様に、情の動く儘に閃いてゐる。

（同）

後日、〈妾は何もいりませんの。お姉様が欲しい〉と訴える染子を〈上げたじゃありませんか〉とからかう（意味をすりかえて）条がある（七十七回）所以だが、こうした交渉自体の深浅差は逢えなくなった時・逢えずにいる間の傷心懊悩の差とも照応していよう。「あきらめ」では、例えば富枝が創作脚本の懸賞当選を学校から咎められて登校しなくなつた時、家まで訪ねて来た染子は

さつと駆け寄つて其の（富枝の）胸に抱きつきながら、／「御機嫌よう。」／と云つたが、その語尾が哀れに消える。そして、黙つて花束を富枝に渡す。（略）「ねえ、お姉様、お姉様は妾の夢を御覧になつて？」／と取縋つた手を、まだ弛めずにゐる。／「え、、毎晩。」（略）「まあ嬉しいことねえ。妾は毎晩々々お姉様の夢を見たり、一と晩中眠らなかつたりして。」／云ひながら室内へ入ると富枝の机の前に坐る。そして小さい手で机を撫で、見て、／「おなつかしいわね。」／と両袖を抱へ込む。／「学校へ出ても、お姉様のお姿がお見えにならないと、一日寂しくつて、寂しくつて、……例も車の上で泣きながら帰つて参るの。（略）図書室の前の桐の樹の傍で、いつも妾が泣いてゐるので、遂々染桐と云ふ名がついてしまひましたの。」

（二十一回）

「妾、斯うして毎日々々貴女のお傍にゐる訳には何うして参らないんでせう、何故真の妹に生れて参らなかつたんでせう。」（略）紫の人は机に凭れて泣いてゐる。／「ミランダ姫のお話を途中まで伺つて彼れ限り突然にお別れして了つたんですもの……（略）其の時には母がお迎へしたばかりで、お姉様は入来しつて下さいました。たつた一日でしたけれど、其の時のお姉様はお優しかつたのに。」（略）夏期の休暇に、染子の母から貴女をお慕ひする余りに健康が勝れずにゐる、是非半日でもい、から大磯へ来てくれと云ふ懇な迎へを受けて、一日大磯へ行つて、氷嚢を頭に置いて臥床んでゐた染子を訪ねた事を想ひ出す。無理に染子の母に引留められて、其の晩は染子と同じ床の中に、沙翁のテンペストの話を為た。（略）「でもお姉様は、先には毎日のやうにお手紙下さいましたのに、この頃は先日の短いお消息一通限り……」／白緞子へ金糸で刺繍をした懐紙入れを出して富枝の前に置く。／「今日までの妾の生命は、その中の短い

お姉様のお消息一通だけ」

（二十二回）

「見て頂戴。」／と云つて、左手の腕環を外して見せたが、其の飾りにした小さな時計の蓋を刎ねると、其の蓋の裏にTとSとが組み合して彫りつけてあつた。／襟止の萩を彫らした小判形の金具が双つに開くやうになつてゐて、其の内には富枝の写真の顔だけを縮写したのが入つてゐた。／其様ことを思つて、富枝は恍惚としてゐる。

（二十三回）

或いは又、前引、二人の最後となる場面の、その前段、上京して来た染子を愕き迎え、付き添って大磯まで送って行く前後――

（突然訪れて来た染子を）富枝は取敢ず自分の座敷へ入れて冷えた身体を暖めさせなどした。病後の染子は眼が隈取つて大きかつた。痩せた手を火鉢の上に揃へて染子は微笑んでゐた。／「よく大磯から来ましたね。何誰も何とも仰有らず。」／「お母様がお帰りになりましたから、後からそつと参りましたの。お姉様をお迎ひに上りましたの。」／染子は斯う云うて又微笑んだ。

（七十五回）

（汽車の中で）染子は富枝にしつかり寄添つてゐた。／「迎ひに来なくても行きますのに。貴女は身体は何ともありませんか。」／富枝は出来るだけ優しく云つた。染子の袖の中からその手を取らうとした時、染子の冷たい手に手袋のないことを初めて知つて、富枝は暫時その手を自分の手で暖めてから、自分の手袋をその手に箝めてやつた。染子は又嵌められた手袋の上から自分の手を撫で、ゐた。（略）染子は足を上げて腰掛の上に坐つた。坐る時汽車の動揺で倒れかゝつたのを富枝は右の手を出して支へてやつた。其の時染子は微笑んだ。

（七十六回）

（夜中に発熱した）染子は富枝の影の見えない毎に呼んだ。呼ばれて富枝が行つて見る度に染子は不安の眼で寝床の近くを見廻してゐるのが常だつた。／「帰らないで。折角お迎ひに行つたんですから。」／染子は斯く云つて頼んだ。その後は富枝は立ちたい用があつても我慢するやうにして枕元に付いてゐた。

（七十七回）

無論これらは通常の異性間恋愛でなら特記する程の事ではなく、むしろお定まりの〈逢えない辛さ〉でしかあるまいが、それが（それなのに）「魔風……」では同性間には説明としてさえも出て来ない。わざわざ云うまでもないから殊更の言及を省いたのだろう、と取り做そうとしても、前引、〈学校に出ても互いに顔を合わせるのを楽しみとし〉云々の、それこそ判り切っている事柄への、格別表現の面で工夫があるというわけでもない言及の存在が邪魔しよう。そして、考えてみれば、これも前出、久しぶりに逢えた姉に抱きついて喜ぶ芳江の感激も（芳江でさえも）ただ姉に逢いたさだけで飛び出して来たというわけではなくて、許嫁に関わっての嘆きを訴えて慰撫や助力を得ようことを、少なくとも目的の一半としての来訪時のものであった。純粋に逢えないこと自体の傷心懊悩が独立した形で見出だせなくて平仄は合う、ともいえよう。

以上を通観していえば、「魔風恋風」での同性間の情合は、「あきらめ」と比較すれば一層明らかだが単独に考えても、異性愛に拮抗するものとしての同性愛とは謂い難い。通常のヘテロセクシュアルの若い女性に於ける一般的な同性の親友関係との、質的な差違は、どうにも見出だし難いのではないか。

実際はそういうものでない交際が殊更〈義姉妹〉と自称されているとなると、その当人か、又は作者か、いずれかの〈認識〉の歪みを想定するのが順序だろう。しかし、では初野芳江二人の錯覚かと考えると、既に見た通りこの二人の対・異性（――交渉）感覚はまず正常といえよう

から、逃避的に対・同性交渉に閉じ篭ってさほどでもない交情を同性間の関係の極致と思い込んだ（思い込もうとした）――といった事情も想像し難い。

それでは作者天外に、少なくともこの作品に関しては田山花袋の〈少女病〉になぞらえて〈少女同性愛病〉とでもよぶべき嗜好があったのだろうかといえば、事情はむしろその逆に近そうだ。この作品の初刊本後篇（明37・5春陽堂）の序文に

世の評家、女学生の恋愛譚を以て天外が得意とする唯一の詩材となす、されど天外詞壇に名を列して爰に十有余年、その作する処長短百篇に余れり、而も女学生界を描写したるは、前後唯この魔風恋風一篇あるのみ。

とするのは直接には自作中の〈女学生の恋愛譚〉の少なさの主張だが、それは自ずと〈女学生界〉への関心の薄さ知識の乏しさ、特殊な嗜好への無縁をも推察させよう。

しかしそうした遠回しな一般論よりも端的に判断を導くのは、同じ「魔風……」中に登場する学院の女教師で「只だ一つ悪い癖は、生徒の好き嫌ひ……顔の美いのを贔屓」し

対人は更るが、始終美しいのを一人手懐けて置いて、一緒に散歩したり、一緒に弁当を遣ったり、それから迷惑がるのを無理に接吻したり、それから、冗談か知れぬが……色々な事を云ふこともある。

（第六　意外）

という人物の存在、及び、その扱いである。

この女性に関しては初野も友人から冗談半分、「貴女はウヲツチ(watch か？）されててよ」「到頭犯(バイオ)られたんでせう」等と言われていて、前述〈初野（及び芳江）の認識不足〉説への反証の追加ともなろうが、その前にまず、作者自身が女性の同性愛について大まかな概念的知識さえも持っていなかった（ために、それらしく書きようがなかった）というわけではないことが、確認される。そして次に、女性の同性愛というものに対しての、この作者の〈共感〉――生活者個人としては誰しもに望み難いにしろ、せめて小説家としての――の乏しさも見とられようか。捉えられているのが主に心理よりも行動面だから皮相に流れやすいとしても、その奥に在る（であろう、かも知れない）ものへの想察はおろか、奥に何か在り得るという理解も感じられない。同じ作中に資産家の画学生の色事師（男性）も登場して、しつこく初野につきまといながら結果的には厚い友誼にも似た一方的なパトロンまがいから踏み出せずにいるのだが、それに比べてもこのレズビアン（正真正銘の）の女教師は格段に心性を疎外されている。勿論ゾライズムなどという不正確な分類に拠っての正当化などは二重に見当違いであって、初野と東吾・東吾と芳江の間については月並な通俗小説的人情描写を無批判に踏襲し、その限りでは極めて正統的に描いているのである。(註2)

そしてこの女教師の〝同性愛者〟性と初野芳江のそれとでは、ともかく一往それらしい要件の具備・不備と作者の扱いが冷淡か好意的かの二点で対照的であるわけで、両者を突き合わせるとこの作者は〝真性〟の女性同性愛（者）に対しては殆ど親しみを感ぜず近づこうともしなかった（もちろん作者として）とせざるを得まい。

では何故そのような――主体的関心も薄く、結果的にも〈同性愛〉と云い立てるだけでそれらしい姿は描き出せなかった（そもそも描き出そうとしなかった？）――そんな題材を、物好きにも（べつに主題ではないのだから）取り込んだのか。それ自体はどうでもいいのだが、主題の三角関係が女二人の間の特殊関係によって緊張感を高め深刻味を増そう、といった、手段としての有効さを狙ってのことでもあったろうか。

だが結果的にそれも肯き難い。既に見て来たところからも想像されようが、女二人相互の〈男への愛との板挟み〉的煩悶にしろ、男の側の、女同志の睦まじさへの憚りにしろ、女二人が通常の親友関係である場合

に予想される域を脱していない――特殊関係に設定した効果は殆ど認められないのではないか。

具体的な比較で示そう。

この作の二年後の小栗風葉の「青春」（明38・3・5～39・11・12読売新聞）で共に文科大学生関欽哉を想う「成女大学」生、小野繁と香浦園枝は普通一般の親友で、二人がライヴァル関係になってからの相互の間も、又それぞれと男との間も、勝敗が決する迄はたしかに「魔風……」より深刻ではない（かつ、繁が勝ちを収めて後の深刻化の因は繁の懐姙―堕胎である）。しかし二作の深刻さの差は、所詮、同種類間の程度差なのではないか。「魔風……」でも、ライヴァルが親しい者ゆえの初野の煩悶（芳江の方は殆どライヴァル意識がないから、問題外）は相手から許嫁を奪う済まなさ、罪悪感がもっぱらで、ひきかえに芳江を失うであろうことの悲しさはさほど苦にされていない。つまりこの点では芳江は初野にとって通常の意味の親しい友人かライヴァルかのいずれかなのであって、いま獲ようとしている異性愛と並び・択一を迫られている（筈の）もう一種類の性愛の相手としては機能していないと謂えよう。

つまり「魔風……」と「青春」との三角関係の縺れ方の差の主因はそれぞれの女二人の通常の意味の親しさの相対的な程度差、及び、「魔風……」では既に許嫁関係だった（のが、もつれた）ことと解され、実際には機能しない同性愛関係という親密度とは別の範疇を殊更持ち込んだ（称した、という方が的確だが）意味は、ここにも認め難いのである。

Ⅱ

そして実をいえば、溯って「帝国女子学院」の「生徒」という女二人の身分設定にも、これと似た、そうあることの必然性の稀薄さ、更には、身分自体の真偽の疑いさえあった。

比較のために先ず「あきらめ」の場合について整理して置くと、こちらの女子大生という身分、女子大学という〈場〉の設定は、明治三十四年四月成瀬仁蔵によって東京目白に開校された日本女子大学校に由るものであることは疑いなく、かつ、作中形象自体にもこれといった不審はない。

日本女子大がモデルというのは、作者田村俊子自身が同校第一期生として短期間とはいえ（通説では一学期、一説に二年）国文学部に在学し、かつ、そこで外人女教師に思慕の情を懐いたとも伝えられる（女主人公の年長の友への慕情の、原像？）から、といった短絡ではない。作品冒頭（初出第一回分）でまず主人公の身の上を呑み込ませて置こうというかのように紹介される「大学」構内の様子が、寮舎が「立並ん」でいて「小学部の小さい生徒」も在寮する（日本女子大の付属小学校は三十九年開設）とか、「絶対に世に出るな。甘んじて犠牲になれ。隠れて奮闘せよ。と教へる校長」とか、その校長の方針に忠実な学監の訓戒（校長の方針の行き渡りぶり）とか、また、女主人公の止宿先の牛込簞笥町から徒歩通学が苦にならないらしい距離（一位置）に在り、そして抑〻、当時「大学(校)」と称した女子の学校は他になかった。

これに対して「魔風恋風」の帝国女子学院というのは、一見、得体の知れない学校である。学科は工芸科・文科・音楽科を置いて「在学生は常に千名に近く、其の基本金は五十万円、器械の具備した事から教授方の整頓した事、卒業生には多くの名媛を出して、最早東洋屈指の大学校」とされ、このたびの「創立十周年祝賀会」には「此の学校の名物に数へられる、仮装舞踏会の催しも有」り、来賓の饗応には築地ホテルと新橋の花月が「和洋二種の献立」の「巧拙を競」って出店する他、「畏くも皇后陛下を初め奉り、某宮、某宮の二内親王殿下、某宮妃、某宮妃等打揃」っての「私立校に（略）如何にも異例」な台臨が予定されているのだが、

この学校の所在地は「巣鴨」とある。

右、これでもかこれでもかと並べ立てた感じの、いかにも通俗ではあるがともかくも〝豪勢〟さ、また、女主人公初野の下宿の主婦は「女子学院の本科を卒業したとなると」という云い方で卒業後の初任給の高額を取り沙汰し、初野自身も「名誉ある女子学院の卒業生として、天晴婦人社会に学者の名を取らう」望みと自負を持ち、先輩の現況を噂に聞いて「左程の成績で女子学院を卒業したならば、猶と堂々たる生活をして居さうなものを、と訝」りもする。「申さば一個の私立校」なのにこうした（これ程の）現世的な〈評判〉を仮構＝空想せしめたヒント（少なくともその主力）は、これも結局は恐らく日本女子大と考えられる。

作中形象と同校との明白な相違点は開設学部がこの当時は家政・国文・英文だった（三十九年度から教育学部が加わる）こと、「魔風……」の発表年にはまだ創立二年目で卒業生を出していない（付属高女は三十五年に第一回卒業式）こと、及び所在地である。それ以外の、とくに「帝国女子学院」像の形成にとって重要でありそうな諸点について云うと、現実の日本女子大の在学生数は同一校地内の付属高女と合算すれば三十五年度八九三名、六年度一〇三五名[註3]（三十九年度に至って大学部だけで一〇〇〇名を超える）、また、創立時の基金は三十万円で帝国女子学院よりも大分少ないことになるが（但しこの額でも頭初目標達成を危ぶまれていたというから、小説の方が大風呂敷過ぎるのである）、その背後に控える発起人・創立委員といった設立スタッフの顔触れを見るなら、後者に岩崎弥之助・大隈重信・近衛篤麿・西園寺公望・渋沢栄一・住友吉左衛門・土方久元・三井三郎助・三井高保ら、前者には右の一部の他伊藤博文夫人・岩倉具定・大山巌夫人・鴻池善右衛門・鴻池新十郎・松方正義夫人・三井八郎右衛門・森村市左衛門らが名を連ねていた。前出の基金はすべてこれら関係者のほか財界からの寄付によるもの、開設時の校地五千五百余坪（のち急速に拡張されて行くが）も三井一族からの寄付であって、いわば政・財界を挙げての支援を受けた――少なくとも、作者天外を含めて一般の目にはそう映ったと思われる――ものだった。

学内の催し物への皇族の台臨は「魔風……」の三年後、三十九年十一月の「秋季文芸会」の折まで待たねばならなかったようだが（「魔風……」以前の《従ってヒントを与えたことも考えられる》似た実例としては、たとえば三十五年、明治女学校の資金獲得のため上野の音楽学校で催された音楽会に二つの宮家から台臨があったという[註4]）、三十四年九月には「私立学校として実に空前」という皇后からの内帑金御下賜があり、三十五年の第二回から同校々庭を会場として催されるようになった秋季大運動会は世間の視聴を集め出していた。

そこで先に相違点の一つとして注意して置いた帝国女子学院の所在地の件だが、日本女子大の目白とは明らかに別の「巣鴨」といえば、同庚申塚が、かの明治女学校が三十年に麹町下六番町から移転し十一年後に閉校となった地として知られている。だがこの移転は前の校舎が火災に遭って止むなく不便な郊外に出たのであって積極的に発展を期し或いは予想させたものではなく、偶然ながら既に兆していた同校の頽勢の象徴のようなことにも成った。従って、その土地を所在地に擬すことで明治女学校を思い浮かべ（たとえ部分的にでも）させるならば、事、右のような「帝国女子学院」に関する限り明白に逆効果だった筈で、これは斯界に対する作者の知識がかつての盛名、かつ、内実に及ばぬ文字通りの盛名にとどまっていたことを示唆しようか。

この作品は初刊本前篇（明36・11刊）自序に、「主人公と二三の主なる人物とは、曽て世に在つた人、それから今現に世に在る人をモデルにした」もので

世の所謂婦人問題、女学生問題に意を用ゐる人にも多少の利益を与ふるものと信ずる。

と、リアリティ及びアクチュアリティを強調しているものの、作者はそ

の実、明治女学校と限らず日本女子大と限らず、現実の〈女学校〉〈女学生〉について、調査――という程ではない基本的事項の事実確認さえも殆ど行わず、正確な知識を持ち現実を踏まえて描くということには意を用いなかったものと断案したいのだが、その最たる徴証の一つは、女主人公が卒業試験を案じて「六月迄は一勉強」「七月迄辛抱」すれば、と、繰り返し自他に言い聞かす、即ち、「此の六月」を卒業期に設定して（「青春」「あきらめ」は「四月」乃至「春」）何の躊躇も見られないことである。

現実の日本女子大の卒業式は第一回が明治三十七年だったから、三十六年の「魔風……」にとっては依拠も無視もしようがなかったとも云えそうだが、しかし入学期は三十四年の第一回以来四月だったのだから、学年暦というものが念頭に浮かびさえすれば卒業は三月と予測するのが自然（実際は第一回卒業式は一月ずれて四月上旬だったが）だったろう。それを何故夏と設定したのだろうかと考えると、当時東京・京都の両帝国〈大学〉をはじめとして男子高等教育機関の卒業期が概ね夏季（七月又は八月）であり、学制上日本女子大（乃至、「帝国女子学院」？）に最も近い女子高等師範も夏だった模様[註5]で、甚だ単純にそれらをなぞったというのが最も想像し易い。しかしそれら既存の高等教育機関は入学期も九月だったのだから、帝国女子学院がもし四月を学年始めとする（日本女子大の実例に合わせて）なら学年末―卒業期も同様四月始業の中等学校以下の実態に倣って三月となるべきなのは自明だった筈である。それを敢てずらした意図は、と考えてみても、その程度の相違を設けることでは例えば現実の或る特定校のモデル視を防ぐといった効果もおぼつかなかろう。不遜を恐れずにいえば、何を考えてのことか判らない、恐らく何も考えなかった――現前の「帝国女子学院」にとって最もふさわしい卒業期（広くいえば学年暦）の設定という問題の存在など、頭を掠めもしなかったのではないか、というのが率直な感想である。

また、これはとくに現実の日本女子大の事実に対する無視の好例となろうが、女主人公は先頃帝国女子学院の認可下宿を取消された怪しげな下宿に止宿していたのを、そこの評判を気にかけた親しい女教師から他の下宿に替わるよう勧められる。しかし、よく知られたことだが日本女子大では創立以来一貫して、教育の一環として積極的に寄宿舎の拡充に努め特色ある生活指導に力を入れていて、げんに（というのもおかしいが）こちらはより明瞭に同校がモデルと判る設定の風葉「青春」での「一千の妙齢を収めて、東都才媛の府と称せらるゝ」「小石川の成女大学」生である繁は、私生活の乱れを懸念した舎監から、下宿替えでなくて入寮を強く勧められて（「構内幾棟かの寄宿舎」の情景も描かれて）いる。――となると、或いは、それほどの無視が見られるならそもそも日本女子大は余り念頭に無かったのではないか、との疑念も生じようか。

しかし、三十二年施行の高等女学校令で女子中等教育が原則四年制、例外として五年制が認められていたこの当時、それより上の年齢（女主人公初野は「生れて爰に十九年」とあり、芳江は一歳下？）を常態とする（当時、学歴の継続していない、年配の女子学生が珍しくなかったことは知られているが）女子の学校は甚だ稀少だった。やや溯るが二十九年の「日本女子大学校設立之趣旨」には「本邦女子教育の現状を見渡すに（略）高等教育に至ては殆ど絶無とも言ふべく、只女子高等師範学校の一あるのみ」とまで云われており、その後女子英学塾が日本女子大より一年早く開校してはいるが、これはその専門性と「家塾風の小規模な経営」[註6]（三十二、四、五各年度の在学生数十八、三十三、五十五）の点で「帝国女子学院」風の人目を引く派手やかさとは対照的であり、当然、このモデルたりえない（ほぼ時期を同じくする三十年創設の和洋裁縫女学校や三十三年同東京女医学校、三十四年同女子美術学校等もほぼ同断）。また幾つかの官公私立高等女学校の高等科・専攻科・補習科の類は、明治女学校の高等科のようにむしろそちらに特色があり学校としても力を

入れていたものも含めて、一般世人の目には所詮中等教育機関の付設課程だったろうから、付属高女さえ持っていないらしい帝国女子学院（全体に学校そのものは殆ど描かれず説明で済まされているから、たしかではないが）の純〈女子大〉イメエジの形成に、日本女子大以上に与ったとは考え難い。

もっとも、そこまで仔細に思い比べる必要は、或いは無いのかも知れない。教育界に対しては単に物見高いだけの世間の一人を余り出なかったかに思われる天外も、恐らく巻き込まれたであろう、開校当時（だけではないが、とりわけ）の日本女子大の何かにつけての話題性は、文芸作品中の風俗に、また新聞記事に、例証に事欠かない。よほどはっきり他校と特定されている場合（例えば藤村の「春」や「桜の実の熟する時」の〈麹町の学校〉――これは紛れもなく明治女学校――のように）以外の、建前としてはフィクションである筈の形象の、その原像は、暗黙裡におよそ決まっている――というのが実情に近かったろうかとも思われる。

しかしじつは――このことを深く考えると作品全体が絵空事化しかねないが――前記、女主人公初野が卒業目前で十九歳（数え年とみるべきだろうが）という年齢設定はかなり強引なのではないか。高等女学校令では四年制の方が原則とはいえ有力校名門校は多くは五年制で、それに対応して日本女子大の場合は五年制卒を入学者の標準とし（三十六年施行の専門学校令で入学資格を四年制卒に規制されてからは、四卒者は予科に収容）、学部の修業年限が三年だったから、卒業学年には満二十歳、数えで二十一、二歳になることは計算すれば判る（啄木ばりの学齢前就学などをとくに想定する理由はない）。げんに、より即実的な「あきらめ」の女主人公富枝は来春卒業という秋に二十二歳（刊本欠）、「青春」の繁は成女大学一年の学年末に十九歳とされている。女高師にしても入学資格は四卒だが年齢が満十七歳以上（文部省編『学制八十年史』資料篇・「学校系統図」凡例）、修業年限は四年と長かった。即ち初野十九歳という年齢設定は女子学生という身分には着想の根拠が求められず、肝心なのはともかく十九歳の妙齢であることだったので女子学生という身分はいわば着せ換え人形の衣裳の一枚に過ぎなかったのではないかと考えさせる。

ここで再び「青春」を思い合わせれば、こちらは「作中人物の提出している問題が自分（風葉）自身の切実な問題となりえ」ず「時代の苦悩が風俗として描かれ」るに留まっている（小田切秀雄氏）にしろ、ともかく「新時代の要諦にふれ」るところの「思想的骨骼をもってい」る（瀬沼茂樹氏）という、主人公達が若い知識人である必要性があり、又、彼ら彼女らはいかにもそういう人物らしく描かれてもいた。[註7] そうした要件を「魔風……」は殆ど欠くにも係わらず女主人公を〈女子大生〉に設定した理由は、一口に云えば当時話題を賑わしていた風俗によって世人の興味を唆ろうとした（或いは同程度に浮薄な《？　しかしその可能性は否定できない》作者自身の興味にも合ったかも知れないが）ものと見るのが通説と思われる。であれば、同様に、作者の内面乃至作品構造に発するいわゆる内発的必然性を認め難い〈同性愛〉モチイフの詐称理由も、外殻の〈女子大生〉という虚名冠称のそれと似たものだったかと類推するのが――些か安易の観はあっても他に考えようも無いのではないか。

もっとも、そう云っただけでは一天外の軽佻とも聞こえようが、天外にその軽佻（には相違ない）をなさしめた、世の話題性のほども見て置かねばなるまい。

生方敏郎の『明治大正見聞史』（大15・11春秋社）は類書の中でも専門的知識にも粋人の趣味にも偏せず、また客観的事実の羅列にも終らず、一般市民のそれに近かろうかと思われる感じ方関心の持ちかたを伝える一冊だが、その中で、明治三十年代後半の風俗現象としての〈女学生〉を同じ学生世代の目（筆者は三十九年早大卒業）から

女子大学も初めて目白へ出来た時分で、何かと言うと問題にされていた（略）

（明治時代の学生生活）

女学生は女子大学の出来た頃から世間の表面に現われて来た。海老茶の行燈袴を穿き、前髪をズッと前に突出したいわゆる庇髪に結って三々五々道を行く女学生の姿は人々の注意を惹いた。

（同）

明治三十五年頃（ママ）、目白に初めて女子大学校が開校せらるるや、天下の耳目はたちまち女学生に集注するに至った。すでに明治初年より女学校あり女学生あって人目をひいていたことは確かだが、何にも歟にも女学生を引っぱり出すようになったのは、この時からだ。（略）世間は女学生に日の丸行燈だの海老茶式部だのと悪口的の別名を付与して、或は揶揄し或は好遇した。

（明治大正）凝視の中心となった女性。

以上引用は中公文庫版による）

と、繰り返し、〈女学生〉フィーバーに日本女子大の開校が演じた役割（註8）の印象的だったことを語っている。そしてその一節に

（略）その言葉は、てよ、だわ式、彼らの中に同性の恋おめごっこというものさえも始まった。鶯堂流の文字で絵葉書を遣ったり取ったりすることが、彼らの学課外の学課となった。

（前引第二文の続き）

として、女性同志の異常交友も〈女子大現象〉と結び付けて――或いはその一要素として――流布し印象されたことを述べている。

そこで、世間の取り沙汰はそれとして〈事実〉はどうだったのか、となると、そうした究明は試みるまでもなく不可能と断じて差支えあるまい。しかし今問題にしているのが女子同性愛という一つの習俗そのものではなくてその文学作品化であり、いいかえれば作家の制作意欲にとっての対象化、さらに一段溯れば当事者以外の第三者の認識対象化なのであることを思い出せば、右の風説のように〈始まった〉のか、それとも以前から存したのかは、さしあたってはどうでもよい。

だが、唐突ながら古典文学の中世小説、いわゆる御伽草子の分類に於て、明治末以来諸家ほぼ共通して〈児物語〉又は〈男色物〉の一項が設けられながら、女性についてのこれに対応する立項を見ないのは何故か。前者の一類の成立事情が

（そこで語られる習俗は）不自然な行為（略）であるが、むしろ本人をとりまく変則的な社会、環境、たとへば兵営とか寺院、監獄、工場等の寄宿舎における生活が、これを生む場合が多い。わが国においては（略）平安朝から鎌倉時代へかけての文献はほとんど僧侶に限られてゐるのであつて、寺院における女人禁制の禁欲生活、変則的な社会構造が、同性ならば許容され得るといふ口実の下に（暗黙の諒解の内に）、（略）もたらしたものと考へられる。宗教が熾盛を極め、寺院が膨脹した中世に入るや、ますます男色の流行を来したであらうことも、想像に難くない。

（市古貞次氏『中世小説の研究』昭30・12東大出版会、第二章2）

と説明されるのは至極肯けるわけだが、そうした事情は、六世紀の桜井寺に始まり八世紀には各地国分尼寺の建立、室町期に入ると京・鎌倉に尼寺五山の称さえ生まれるところの〈尼〉寺に於ても本質的には変わらなかった筈である。しかも、尼僧の物語は残らなかった。

事例を近代に採れば、右引用文で変則的環境の一代表例に挙げられた工場寄宿舎の、女子のそれとして設置数も収容人数も最も多かった紡績工場の場合については、実際に「同性愛」が「甚だ多」く「精神的に相愛するだけに止まらず概して極端な肉的行動に及ぶ」傾向を、細井和喜蔵『女工哀史』（大14・7改造社）が指摘している（十六章）。ここで直接調査見聞されているのは大正期が中心であるが、産業史的には明治三十

年前後まで溯らせて考えうることのようである。にもかかわらず、この種、女工同志の間の性愛を描いて広く流布した（たとえば「あきらめ」乃至「魔風恋風」なみに）明治の小説作品というのは、事実問題として存在しない。

これを要するに、或る生活習俗が存在しても――それが作者の目にとまり、関心を引き、次に、かりに作者はその題材が世に迎えられるか否かは度外視して作品化したとしても、その次の段階で時世の好尚に合わなかったなら、作品として世に広まり次代に伝えられることは難しい、ということであろう。むろん自明のことには違いないが注意すべきは、作者は自分の生きた時代・社会を描く義務がある、とか、読者は文芸作品に愉悦ばかりを求めてはならない、とか云ったところで、作者にも又読者にも、義務当為とは別にそれぞれに好む所と然らざる所があるのである。

中・近世の尼僧達への一般俗衆乃至潜在的作者・読者（現実には作品化を見なかったわけだろうから）の関心は今措いて、明治の作者・読者の目にレズビアニズムという習俗が相応の魅力（描きたいと感じ、読む気になる）あるものに映るには、まず、その習俗を存する――かに見える――或る階層なり集団なり（前引市古氏文、参照）が目を惹くものとして存在することを要したのではないか。尼僧達は知らず、紡績女工達はこの点に於て、実際に習俗は存していても作品化の条件を満たし得なかったのではないか。

そしてその条件に日本女子大（の開校）がほぼ合致したらしいことは、既に見て来た。

一つだけ付け加えれば、寄宿舎生活を通じての教育も重視した同校の寮舎の規模は開校当初に於て建坪延べ二七七・七五坪。これを、例えば、もともとすべての規模が違いすぎるとはいえ同じく寄宿舎の意義を積極的に認めその経営に意を用いた明治女学校と比較すると、こちらは「交通も誠に不便で、書生の大部分が寮生活をする様にな」った（巌本善治「撫象座談」、昭11・12『明日香』）巣鴨校地に於て（移転当初）五十五坪であった。学園生活一般とは又違った意味で人目を引くのは必定の学寮生活の、スケールによる目につき方もまた優れていたことが察せられるのである。

――そして「魔風恋風」の八年後、こちらは正真正銘のレズビアン・ラヴを、恐らく初めて本格的なタブロオに仕上げた「あきらめ」に於ても、女主人公の生活や行動の大部分は〈女子大生〉という身分設定に対して、「魔風……」でのように不似合という所はないが、さりとてとくにそういう身分としてのものというわけではなく、その同性間関係だけが殆ど唯一、この身分設定と一体となって成立していた。

本稿で見て来たことの延長線上にこれを置いて眺めるなら、これも又、作者田村俊子の独創でもなく気紛れでもなかった（少なくとも、それだけではなかった）ものと解されることになろうか。

註1　この作品の同性間の描写は初刊（明44・7金尾文淵堂）当時の時評でも「歌麿や豊国の筆で書かれた今様の美人画を見るやう」（明44・9『早稲田文学』）「浮世絵を（略）油絵に書き直した位の感じはある」（44・11『新日本』）などと注目されている。なお「あきらめ」に対するレズビアニズムの視点からの考察は小稿「『あきらめ』のもう一つの顔」（札幌大学女子短期大学部紀要十九号、平4・2）に詳述した。

2　「彼が苦労して身につけたゾラ張りの風景描写や気の利いた会話や新時代人の性格の描き方は、そのまま新しい通俗小説（『魔風……』をさす）を書くのに役立つた。」（伊藤整『日本文壇史』七巻、昭39・6講談社）

3　以下、日本女子大に関するデエタは主として『日本女子大学校四拾年史』（昭17・4刊）に拠る。

4　以下、明治女学校については主として青山なを氏『明治女学校の研究』（昭45・1慶応通信）に拠る。

5　『東京女子高等師範学校六十年史』（昭9・10刊）一二九頁に「大正三年十一月十七日　本校及び付属高等女学校卒業式を三月二十七日に改め」る旨が見え、一方、二三四頁に付属高女について、開校（明治十五年）当時「学年は九月に始つて翌年八月に終」った旨が見える。

6　『津田英学塾四十年史』（昭16・9刊）に拠る。

7　「『青春』は（略）『ルージン』に拠ったとはいえ、明治三、四十年代の日本の知識人の姿を、見事に写しだしたにはちがいない。（略）島崎藤村の『春』に先立って、青年男女の談論風発の場面を重ねていることに注目したい。この点において、当時世間を賑わした堕落女書生の問題を古風に描いた『魔風恋風』と同日の論ではなく（略）」（瀬沼氏「風葉の『青春』について」、昭46・5講談社刊『大衆文学大系』第一巻付録「月報」1）

8　前引第三文の続きには「女学生は時の小説家の流行児、小杉天外を得て小説の材料にまでなった」として、「魔風……」そのものをも明快に〈女子大現象〉の一端と割り切った受取り方のあったことを示している。

なお、「魔風恋風」と「青春」の本文はそれぞれ改造社版『現代日本文学全集』第五十三篇、講談社版『日本現代文学全集』第十一巻に、「あきらめ」は初出紙マイクロフィルムに拠った。

（平5・3・27稿）